

シートウニガイ
宮古諸島西原の生徒願い

平井 芽阿里*

I はじめに

沖縄県の宮古諸島には「生徒願い」という村落祭祀がある¹。「生徒願い」は、児童や生徒、学生
の健康と安全、運動や勉学の成就を祈願する村落祭祀であり、池間、佐良浜、仲地、西原、
久松、宮原、狩俣など各地に存在する。近年、南西諸島の村落祭祀の多くは存続が困難となっ
ており、神役不足を始めさまざまな問題が指摘されている。新しい候補者を祭祀集団に加入さ
せるために任期や日程の変更を試みる地域もあるもの〔平井2006〕、神事に関することがらは
「昔のまま」に保たれねばならないという「始原遵守理念」があり〔島村1993:108〕、「祭祀の上で
は過去に行われてきた御願を中断・廃止することは厳しく戒められている」ことがほとんどで
ある〔大本1998:61〕。そのため、村落祭祀の1つの核となっているのは農耕儀礼やそれに伴う諸儀
礼でありながら〔上原1989:203、大本1998:61〕、豊作祈願を行う農作物が実際には栽培すらされ
ていないといった現状もある。

一方で、生徒願いなどは、現代においても日常生活に密接しており、どちらかというに参加
者も多く盛んであるといえる。しかし、生徒願いに関する報告は未だ十分ではない。そこで本
稿では西原地域の生徒願いを対象とし、まず村落祭祀全体の中でどのように位置づけることが
できるのか、分類を行う。次に西原の生徒願いの具体的な内容を述べた上で、宮古諸島各地の
生徒願いも踏まえ、生徒願いの特徴を導きだし報告することを目的とする。

なお、宮古諸島の概要や西原の祭祀組織であるナナムイ、御嶽についての詳細は『比較民俗
研究』21号の「村落祭祀継続の要因に関する一考察—なぜ神役であり続けるのか：宮古諸島西原
の事例—」に詳しいので、ここでは省略する〔平井2007b〕。

II 西原の村落祭祀

1. 村落祭祀の分類

宮古諸島の西原にはナナムイという祭祀組織があり、一定年齢に達した男女が参加する。西
原では年間40回以上、主にハナヌンマという地位的に上位にある神役集団とナナムイヌンマとい
う年齢階梯的に構成される女性集団を中心として村落単位の儀礼を行っている。本稿では、ヒ
ューイトリヤという日取りを決定する者が選定した日に、ナナムイが中心となって行う儀礼を
「村落祭祀」とし、担い手を「神役」とする²。なお、村落祭祀は通常カンニガイ（神願い）、ニ

*中部大学人文学部日本語日本文化学科非常勤講師

ガイと称される。

前半(春期)		後半(秋期)		
月	名称	月	名称	
1月	①ヒューイ取り	9月	①ヒューイ取り	
	②旧正月		②⑥ッサンサグムイヌウタキヌサウズ	
	③ビーズングムイヌウタキヌサウズ		④ムッダミニガイ後半	
2月	④ムッダミニガイ前半	10月	⑤ウフユダミニガイ後半	
	⑤ウフユダミニガイ前半		⑥ウカディダミニガイ後半	
3月	⑥ウカディダミニガイ前半		⑦ンーダミハナダミニガイ後	
	⑦ンーダミハナダミニガイ前半		⑦ユークイヌサウズ	
	⑧ウチャナクニガイ		⑧ユークイ	
	⑨ンツガマニガイ前半		⑨ンマユイ	
	⑩ムラダミニガイ前半		⑩ミヤークツツ	
	⑪シートウニガイ前半		⑩ムラダミニガイ後半	
4月	⑫ムスヌンニガイ		11月	⑪シートウニガイ後半
	⑬ウチャナクスカサンプン		12月	⑪トツマイニガイ
	⑭ムズヌウパツ			⑫ンーヌウパツ
	⑮ヤナムヌハラスニガイ	⑬ンツガマニガイ後半		
	⑯フツムトニガイ	⑭カーヌカンニガイ		
⑰公民館ヌヤシキダミニガイ	⑭シーブ			
5月	⑱学校ヌヤシキダミニガイ	その他(不定期)		
	⑲公民館ヌウフユダミニガイ	不定期	⑮ウーンマストヌバンニガイ	
	⑳アーヌウパツ		⑯ウーンマヌムツジャウズニガイ	
	6月		㉑ヒューイヌウタキヌサウズ	⑰アーグスヌマヌムツジャウズニガイ
㉒ヒューイ			⑱ナカバイニガイ	
㉓六月ニガイ		⑲ヤカズヤーカラヌニガイ		
㉔ツマウサラ		⑳ムヌスの訪問		
7月	㉕公民館ヌフツバナヌニガイ	その他		

表1 村落祭祀一覧

西原の村落祭祀は前半(春期)と後半(秋期)に分けて行。西原では旧暦の7月を「カンナニヤーンちち(神不在の月)」と称し不浄の月と考えることから神々に関する儀礼は行わず、墓の清掃などを行う〔上原1989:202〕。上原はこの「カンナニヤーンちち」以前を春、それ以降を秋として「春の儀礼が秋にくりかえされるという、いわゆる対照的な構造を形づくっている」ことが西原の村落祭祀の大きな特徴であると指摘している〔上原1989:203〕。村落祭祀の日取りはヒューイトリヤが最高指導者であるウーンマの干支に合わせて毎年決定するため、必ずしも毎回同じ順序で行うわけではないものの、前半と後半に行われる村落祭祀の項目は決まっている。西原の村落祭祀の概要についてはすでに別で述べているため〔平井2006:23、2007a:361-362〕、本稿では、個々の村落祭祀に番号を付加し分類をすることから始める。その際、前半と後半に繰

り返し行う村落祭祀については、供物の分量や日程などが多少異なるものの、中心的な担い手となる司祭者、手順等に大きな変化はないため、前半と後半のみ区別し番号は同一とする。分類を行う上で、神役の任期終了に伴って行うウーンマヌムツジャウズニガイ、アークスヌマヌムツジャウズニガイ、ナカバイニガイ、およびウーンマへの労いとして毎年行うウーンマヌトウスヌバンニガイは行う月を不定期とした。また、ヤカズヤーカラヌニガイとして、各家や企業、地域の工事などに関する神願いをハナヌンマが行うこともあるが、行う日や行う回数等はその時々異なるので、これも行う月を不定期とする。さらに、西原では前半と後半の村落祭祀の合間、または終了時にムヌス（民間巫者）の家を訪問する。2000年以降は、頻繁にムヌスの家を訪問していることと、村落祭祀としての祈願を行うわけではないことから、ムヌスへの訪問はその他に分類した。

まず前半に行う村落祭祀は、①ヒューイ取り（日数取り）、②ピーズングムイヌウタキヌサウズ（春の籠りの御嶽の掃除）、③旧正月、④ムツダミニガイ（麦鎮め願い）前半、⑤ウフユダミニガイ（大世鎮め願い）前半、⑥ウカディダミグムイ（御風鎮め願い）前半、⑦ンダミハナダミニガイ（芋鎮め米鎮め願い）前半、⑧ウチャナクニガイ（ウチャナク願い）、⑨ンツガマニガイ（神酒願い）前半、⑩ムラダミニガイ（村鎮め願い）前半、⑪シートウニガイ（生徒願い）前半、⑫ムスヌンニガイ（虫払い）、⑬ウチャナクヌカサンブンニガイ（ウチャナクの重ね盆願い）、⑭ムズヌウパツ（麦の御初）、⑮ヤナムヌハラスニガイ（悪霊払い願い）、⑯フツムトニガイ（口元願い）、⑰公民館ヌヤシキダミ（公民館の敷地鎮め）、⑱学校ヌヤシキダミ（学校の敷地鎮め）、⑲公民館ヌウフユダミ（公民館の大世鎮め）、⑳アヌウパツ（栗の御初）、㉑ヒューイヌウタキヌサウズ（大日選りの掃除）、㉒ヒューイ（大日選り）、㉓六月ニガイ（六月願い）、㉔ツマウサラ（村ウサラ）、㉕公民館ヌフツバナスニガイ（公民館の口払い願い）の計25項目である。

次に、後半に行う村落祭祀は、①ヒューイ取り、㉖ツサンサグムイヌウタキヌサウズ（秋の籠りの御嶽の掃除）、④ムツダミニガイ後半、⑤ウフユダミニガイ後半、⑥ウカディダミニガイ後半、⑦ンダミハナダミニガイ後半、㉗ユークイヌサウズ（世乞いの掃除）、㉘ユークイ（世乞い）、㉙ンマユイ（母選り）、㉚ミヤークツツ（宮古節）、⑩ムラダミニガイ後半、⑪シートウニガイ後半、㉛トゥマイニガイ（泊願い）、㉜ンヌウパツ（芋の御初）、⑨ンツガマニガイ後半、㉝カーヌカンニガイ（川の神願い）、㉞シーブ（歳暮）の計17項目である。また、不定期に行う村落祭祀は、㉟ウーンマヌトウスヌバンニガイ（大母の年の願い）、㊱ウーンマヌムツジャウズニガイ（大母の持ち上げ上手願い）、㊲アークスヌマヌムツジャウズニガイ（神司の持ち上げ上手願い）、㊳ナカバイニガイ（中栄え願い）、㊴ヤカズヤーカラヌニガイの計5項目である。その他としては、㊵ムヌスの訪問など1項目がある。

以上のように、西原では前半25回、後半17回、不定期5回とその他1回を合わせた合計48項目のナナムイによる村落祭祀がある。表1には西原の村落祭祀を前半、後半、不定期、その他に分類し一覧にした。表記と順序、行われる月は1995年から2009年までの「神行事日程表」の分析お

よび先行研究を参考にした〔上原1989:183-197、比嘉2001:118-120〕。行う月はいずれも新暦である。

2. 村落祭祀の種類と内容

西原の村落祭祀の個々の儀礼を見ると、麦の豊作を祈願するムツダミニガイの前半と後半（以後前後とする）、芋の豊作を祈願するンダミハナダミニガイの前後、粟のンツ（神酒）の豊作を願うンツガミニガイの前後がある。またムズヌウパツ（麦）、アーヌウパツ（粟）、ンヌウパツ（芋）といった作物の初穂をンツを作り祝う儀礼がある。ヒューイは収穫祭であり、ムスヌンは作物の害虫を追い払う儀礼であるなど、農耕儀礼が占める割合が高いことがわかる。

他に、村落の豊穰を祈願する儀礼として、ウフユダミニガイの前後、ムラダミニガイの前後、公民館ヌウフユダミニガイの前後、ユークイ、ミヤークヅツがある。また村落の安全を祈願する儀礼として、大雨や台風などの災害から守られるよう願うウカディダミニガイの前後、悪霊払いのヤナムヌハラスニガイ、厄払いのツマウサラ、悪口を村落外に払う公民館ヌフツバナスニガイなどがある。祈願の前に行う掃除の儀礼としてはピーズングムイヌウタキヌサウズ、ツサンサグムイヌウタキヌサウズ、ヒューイヌサウズ、ユークイヌサウズがある。敷地に関する儀礼である学校ヌヤシキダミニガイや公民館ヌヤシキダミニガイ、航海安全と豊漁を願うトゥマイニガイや六月ニガイ、水の神々に感謝するカーヌカンニガイ、海の祈願であるフツムトニガイなどがある。フツムトニガイは、真謝港の水路を造り、船が内海まで入れるようになってから始まった儀礼であるといわれているため、分村の歴史と関わる儀礼にも含まれる。これには、ウチャナクニガイ、ウチャナクヌカサンブンニガイも含むことができる。ただし、ウチャナクニガイやウチャナクヌカサンブンニガイは、住民の健康を祈願する儀礼というようにも分類できる。さらに、全ての村落祭祀を開始する儀礼として旧正月があるだけでなく、ユークイやミヤークヅツは、「退役（隠居）する儀礼であると同時に加入儀礼」でもある〔上原1983:80〕。

生徒願いは学校や児童、生徒、学生に関する儀礼である。西原ではシートウニガイとして、前半と後半に年2回行われていることがわかる。さらに、学校ヌヤシキダミニガイでは学校の敷地願いと同時に児童や生徒の安全も祈願されているため、西原では学校や児童、生徒、学生に関する儀礼が1年に複数回行われていることがわかる。

3. 主な神道具と供物—ブンビシ

次に、西原の村落祭祀で使用される主な神道具と供物について述べる。ブンビシとは、カンヌブン（神の盆）を供えることを示し、ブンとは盆を、ビシとは盆を並べることを意味する。ここではブンビシを図式化するにあたり、凡例を図1から図4まで提示する。左側には使用する神道具と供物の図、中央には図式化した神道具および供物の図、右側にはそれぞれの名称を示している。

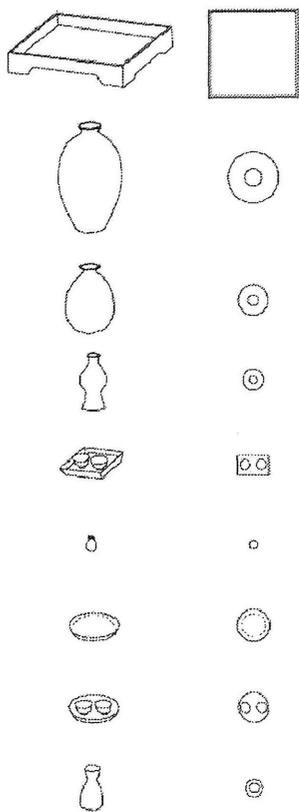


図1 ブンビシ凡例

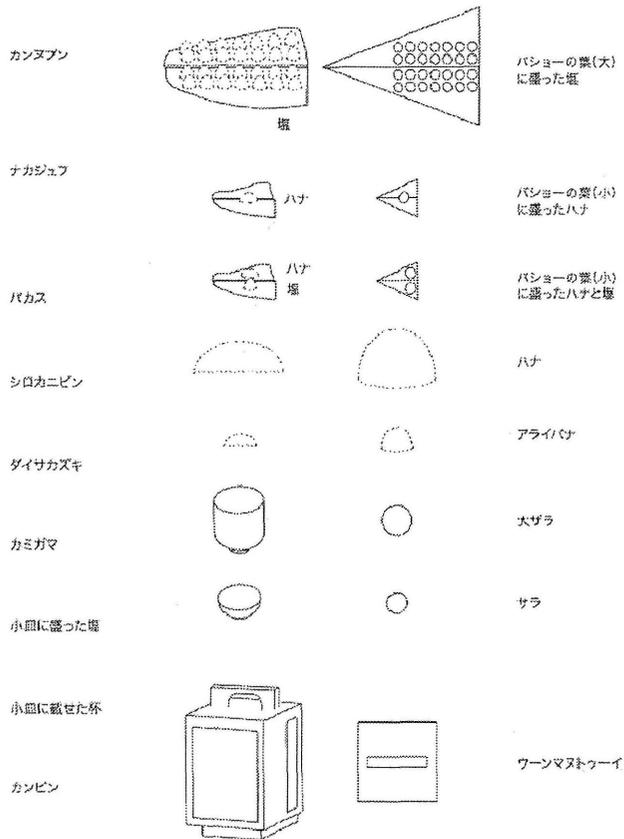


図2 ブンビシ凡例

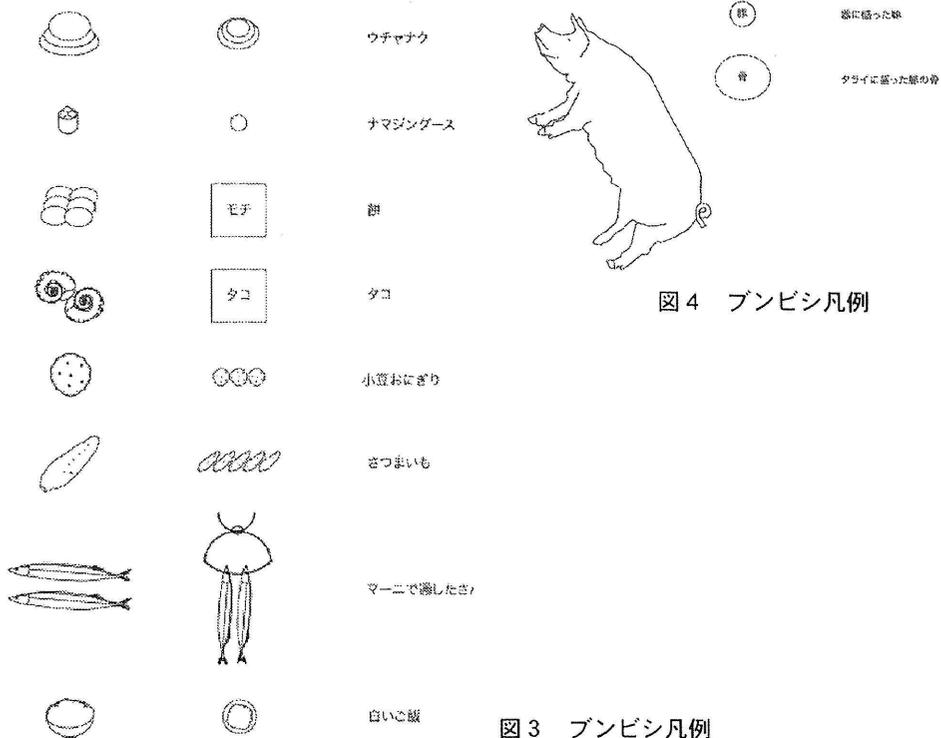


図3 プンビシ凡例

以上のように、ここでは西原で使用する主な神道具、供物などについて示した。まず、使用する主な神道具については、最も重要視されるカンヌブンを始めとし、使用頻度の高いバカス、ナカジュフ、シロカニビン、ダイサカズキ、カミガマ、小皿に盛った塩、小皿に載った杯、カンビンなどを配置した。これ以外には、大ザラ、サラ、ウーンマヌトゥーイなどがある。まず、カンヌブンは木製の四角い盆のことであり、タカブンとって足の高い盆であることが特徴である。カンヌブンは2枚あり、一部の例外を除き2枚一組で使用する。バカスとナカジュフとは神壺のことを示す。バカスはミズヌウヤバカスとも称する。シロカニビンは白と銀色のものがあり、通常2本一組で使用する。ダイサカズキとは、木製の台の上に杯を2組載せたものを、カミガマとは陶器製の小さな神壺のことを示す³。これ以外にも小皿に塩や杯を2組載せて使用するほか、カンビンとしてのいわゆる徳利などがある。また、大ザラとは木製の器のことであり、2組ある。これをフジャラ、ユナウスともいう。サラは、木製の器を黒い漆で染色したものであり、中ザラともいう。ウーンマヌトゥーイとは、ナナムイの最高指導者であるウーンマの灯籠を意味する。ウーンマヌトゥーイ以外にも、3つのトゥーイがあり、西原最大の聖地とされるウバルズ御嶽での籠りにクムイジャーで使用する。トゥーイにはマー油として、ごま油を使用し火を灯す。

次に使用する供物については、まずバシヨ（カッサ）として、芭蕉の葉の上に塩などを盛

る。パシヨーには、大と小がある。また、ハナとしての米は通常洗わない米を示しアカバナと称す。洗ってから使用する際にはアライバナと称す。ウチャナクとは、三段に重ねた大中小の餅を意味し、ナマジングースとは、小さく丸めた餅を湯呑みに入れたものを示す。この丸い餅自体をティモチ、ジングースともいう。また、餅、タコは木製の箱に横3列、縦5列ずつ15個供える。タコは足の部分のみ使用し、頭の部分は使用しない。小豆おにぎりとは小豆ご飯で炊いた米を丸く握ったものである。芋に関する村落祭祀では、里芋、紅芋、田芋など芋の種類は問わないものの、さつまいもを使用するのが一般的である。マーニで通した魚とは、マーニという植物（クロツグヤシ）の葉を上下に割き、芯の部分をもサンマのエラから目に通し、結んだものである。他に白いご飯、豚などを使用するが、ここで図式化した供物が全てであるというわけではない。なお、ブンビシの配置については図5のようになり、本稿では、以後下段の部分のみ表示する。

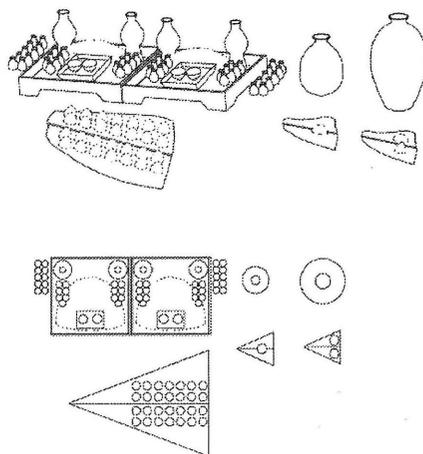


図5 ブンビシ凡例

III 西原の生徒願い

1. ウパルズ御嶽とナカマ御嶽での祈願

ここに示す事例は、2004年5月16日の日曜日に行われたシートゥニガイの様子である。シートゥニガイは午前7時から午後2時にかけてウパルズ御嶽、ナカマ御嶽、西辺小学校と西辺中学校で行われた。司祭者となるのはハナムンマとナナムイヌンマであり、ナナムイをすでに卒業した元ナナムイヌンマと小中学校の教員および生徒が参加する。元ナナムイヌンマは身内が幼稚園、小中学校、高校、大学などに在籍している際や働いている場合に参加する。ところで、例えばユークイやミヤークツツといったナナムイの他の村落祭祀に元ナナムイヌンマが参加することはある。しかしながら、シートゥニガイのように元ナナムイヌンマが線香を束ねたり、火の付いた線香を供えたりするなど儀礼の手順に手を加えるのは、このシートゥニガイのみであるといえる。そのため、最高指導者として上位に位置づけられるウーンマであっても「緊張する」のがシートゥニガイの特徴でもある。ある神役はシートゥニガイの様子を「一緒に参加している大先輩のオーバー達の視線が突き刺さるかのように痛く感じられ、ハナムンマやミージャウズも緊張しているようだ」と体験記録に残している〔赤嶺2001:101〕。シートゥニガイの目的は職員を含む西原の全児童、生徒、学生の健康、安全、運動、勉学の成就を祈願することである。西原では年に2回、前半は新入生に対し、後半は受験生のための祈願を行う。

ハナムンマとナナムイヌンマ、元ナナムイヌンマは、通常の村落祭祀で捧げる供物であるハ

ナ（米）、酒、塩、線香の他に卵を持参する。西原の村落祭祀で卵を使用するのはシートウニガイだけである。なぜ卵を供えるのか、といった点については次のような説明がなされる。もともと卵は供えていなかったが、かつて卵は大変貴重な食材であったことから、神々にも供えようということになった。「総理大臣の卵、校長先生の卵、偉い人の卵」というように、次第に「卵には生徒の魂が込められている」との意味づけがなされただけでなく、「教員が卵をあため、丈夫な雛に孵し大空へ（世の中へ）と羽ばたきますように」との願いを込めて供えるようになったといわれている。そのため、現在では神々に供えた卵は全て教員に分配され、教員は「生徒の魂」を責任を持って大切に食さなければならないとされている。

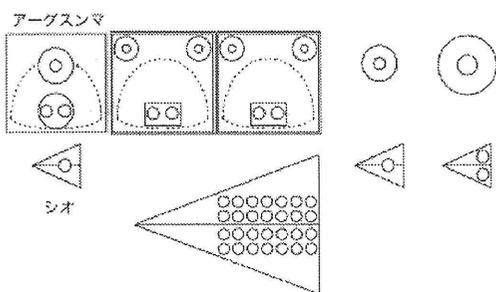


図6 ウバルズウタキのブンビシ

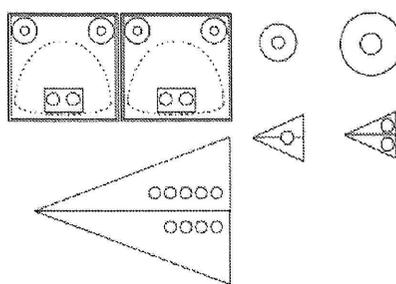


図7 ナカマウタキのブンビシ

シートウニガイはウバルズ御嶽から始まる。ハナヌンマやナナムイヌンマ、元ナナムイヌンマは御嶽に集まると複数の神々を拝んだ後で掃除などをし、各自持ち寄った線香を束ね、図6に示したように供物を供える。卵は1つの籠に集めてから神前に供える。

ハナヌンマ以外が持参したハナや酒、塩、菓子などは一端集め、神々に供える。供物の準備が終わると、ウーンマがシートウニガイ開始の挨拶をし、神歌を謡った後で線香に火を付け、西原の児童、生徒、学生、教職員の健康と安全、運動、勉学の成就などを祈願する。その後、参加者全員に酒を柄杓に2杯ずつ分配し、ウバルズ御嶽での神願



写真1 ナカマ御嶽での祈願

いが終了後、ナカマウタキへ行く。

ナカマウタキでもウパルズ御嶽と同様に祈願を行い、供物は図7に示したように供える。ナカマ御嶽では、ハナムンマが持参した重箱とさしみ等も神々に供え、皆で食す。ウパルズ御嶽と同様に、御嶽では神々を正面とし年長順に座る（写真1）。神願いが終了後、西辺小学校へ向かう。

2. 西辺小学校と西辺中学校での祈願

西辺小学校には、校舎の裏にシートウニガイを行うためのイビがある。シートウニガイが行われたこの日は日曜日であったため、児童の姿はほとんどなかったものの、小学校の教員の多くが参加した。供物を供える時には、図8に示したように小学校からの「供え盆」というものがある。供え盆には透明のグラスを2つ使用し、小皿の上に置く。供え盆の下には菓子を供え、キャンブンの左側には卵も供える。また、各自持参した線香を大きな束にまとめる（写真2）。

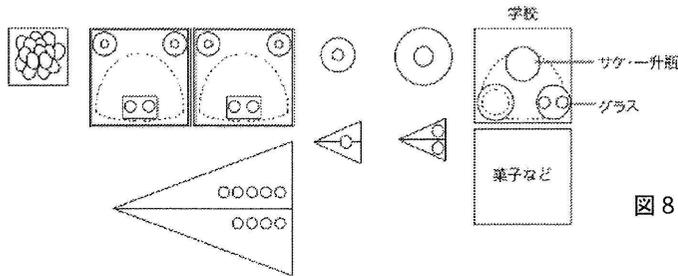


図8 西辺小学校のブンビシ



写真2 まとめられた線香の束

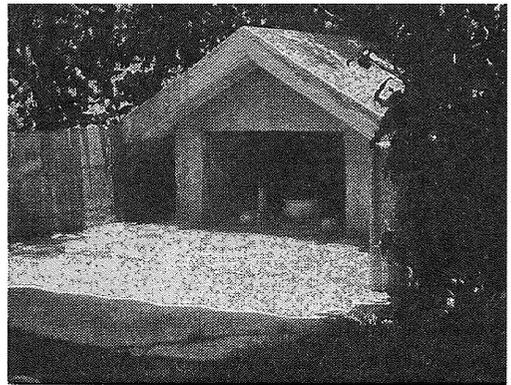


写真3 西辺中学校のイビ

なお、ナナムイが行う村落祭祀でも各自持ち寄った線香を束ねて使用するが、「シートウニガイの線香束が一番大きい」という特徴がある。これは、元ナナムイヌンマが複数持ち寄る線香の数に加え、ナナムイには加入していないものの、線香のみ供え、いわゆる「代理願い」を行う

母親たちの存在があることにもよる。線香に火をつけ祈願を行った後、ブンビシの供物の一部を少しずつ取り、学校の敷地内の別の場所にも供える。これをウサギという。

写真2の線香は火をつけてイビの部分に供え、祈願を行う。また裏門、南側の門の左、正門の両側、南側の門、学校のトイレにも線香とハナ、塩、酒の一部を供える⁴。これらの場所以外に、小学校の敷地内にあるガジュマルの木の下にも線香などを供える。全ての祈願が終わると、参加者全員がグラウンドに集まり、クイチャーを踊る⁵。その後、西辺中学校へ移動する。

西辺中学校にも小学校と同じように校舎の裏にイビがあり（写真3）、同様の手順で祈願を行う。中学校では、図9に示した通りに供物を配置する。イビには大きな線香の束を2束、火を付けてから供える。西辺中学校では教職員の他、部活動などに参加していた生徒も参加した。生徒はイビを正面として、ハナムヌマのすぐ後に座り、生徒の後には元ナナムイヌマ、ナナムイヌマ、その後に教職員が座り、祈願を行った（写真4）。中学校でも、敷地内にあるイビ、プールの階段と全ての門にウサギとして供え物をする（写真5）。

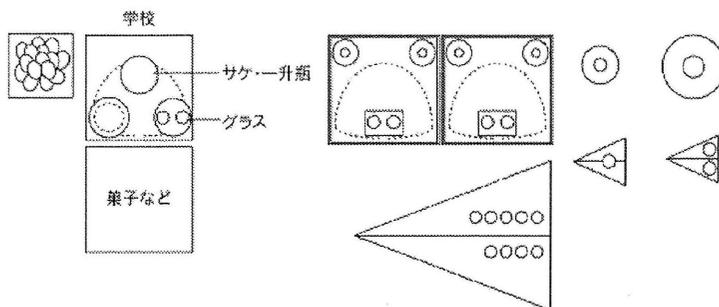


図9 西辺中学校のブンビシ

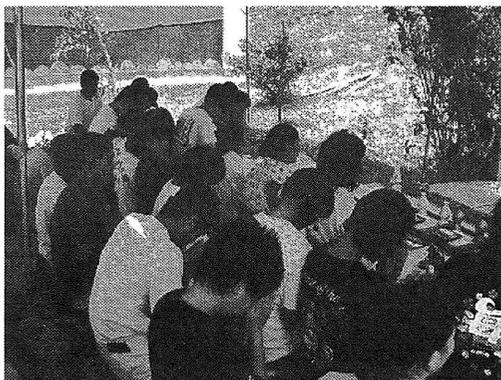


写真4 祈願を行う生徒たち



写真5 学校の敷地内にも供え物をする

全ての祈願が終わると、小学校と同様に参加者全員でクイチャーを踊り、シートウニガイは終了となる。神前に供えた卵は教職員に分配し、帰路につく。

以上が西原のシートウニガイの詳細である。次に、宮古諸島の生徒願いについて述べる。

IV 宮古諸島の生徒願い

宮古諸島の生徒願いは、先行研究で確認できるだけでも、池間、佐良浜、仲地、西原、久松、宮原、狩俣などで行われている。ここでは、まず平良市編さん委員会編の『平良市史 第7巻資料編5（民俗・歌謡）』（1987年）を参照し、各地の生徒願いの概要についてまとめてみたい。

久松では、「学校ダミ・道ダミ」として、3月の己亥の日に行う。内容は「生徒の健康、部落民の交通安全祈願。ウブドマラ、アガツザー御嶽で祈願した後、久松小・中学校のイビと、部落の各道路の交差点で酒、塩、アライ米、線香等を供えて祈願する」とある〔平良市史編さん委員会1987:401-402〕。次に、宮原では「シトウウガン・クルマウガン」として8月に行うとの記録がある。内容は「昔は日程を決めて学校のイビに行って祈願した。（現在は運動会などに祈願している。）そして、同日馬車やリヤカーなど、車輪のついた道具へのウガンを行う。これはいわゆる交通安全のウガンで、サトウタキで行う」〔平良市史編さん委員会1987:411〕。また、島尻ではシートウニガイとして、2月、4月、5月に「児童・生徒の健康と学問精進の祈願」があり、「ウブジラとトウミに祈願されたのち、学校のイビにいつて行われる」とある〔平良市史編さん委員会1987:424〕。狩俣ではシートウニガイとして4月の「小学校校長の生れ年」の干支で日取りを決定して行う。内容は「生徒の健康と安全を祈る。生徒も参加して行われる。祈願は生徒の集まる場所、勉強する場所である学校のイビ、公民館のイビとウブグフムトで行う」とある〔平良市史編さん委員会1987:429-430〕。

次に、伊良部仲地でも「シートの願い」を行うとの記録がある。「シートの願い」は8月に行われ、「公民館、中ドズ、ノヨシ、口ムト」といった御嶽で酒、洗米、塩、線香の他に餅を供え、児童、生徒の健康と幸福を祈願する〔大川1974:85、伊良部村史編纂委員会1978:1235、大本1993:70、1998:69〕。

なお、西原の分村元である池間と佐良浜でもシートウニガイを行っている。佐良浜では4月か2月に大主御嶽と大和神、各学校で児童、生徒の健康と学業成就祈願を願う〔大川1974:91〕。また「子女を学校にやっている家、学校に働いている人のある家は、すべて盆をもってニガイに参加する」とある〔伊良部村史編纂委員会1978:1241-1242〕。他に、「道路における生徒の安全と健康祈願」も行う〔琉球大学民俗研究クラブ編1972:54〕。池間では村の生徒の健康祈願として御嶽、トゥヌガナス、学校の順に行うとある〔琉球大学民俗研究クラブ編1972:49〕。トゥヌガナスとは、「大和（日本）からの漂着神」であり、この側が旧学校跡にあたる他、「現在の小中学校校庭の隅には神願いをするように区切られた場所があり、そこで行う」と書かれている〔野口1972:226-227〕。

次に、西原のシートウニガイの概要についての記述も複数ある〔赤嶺2001:101-102、川上

2003:93-97)。西原では3月と10月に2回行うという特徴があり、行う日は「干支は小学一年生の生まれ年」にあわせる他、祈願終了後に学校の運動場でクイチャーを踊るという特徴がある〔上原1989:189、1996:144〕。

以上のように、ここで取り上げた先行研究では、宮古諸島の久松、宮原、島尻、狩俣、仲地、佐良浜、池間などでも生徒願いが行われていることを確認することができた。ただ、先行研究の中には1970年から1980年代にかけて出版されたものが多い他、宮原の事例では、すでに「昔は日程を決めて学校のイビに行って祈願した」が、現在は運動会などに祈願しているとの記述がある〔平良市史編さん委員会1987:411〕。そのため現在でも同様の祈願を行っているかどうかについては、佐良浜と西原地域を除き、今後も調査が必要である（図10）。



図10 2004年4月25日『沖縄タイムス』朝刊19面市町村掲載記事

V おわりに

このように、本稿では宮古諸島西原を事例に、まず生徒願いを村落祭祀全体の中でどう位置づけることができるのか、分類を行った。次に生徒願いの具体例を示した上で、先行研究から宮古諸島各地の生徒願いについても述べた。上原が指摘するように、西原の村落祭祀では芋、麦、粟の豊作祈願と虫払い、神酒を供えて祈願を行うなど農耕儀礼が1つの核となっている〔上原1989:203〕。先述したように、西原では神役不足の問題が深刻であり、村落祭祀の存続が困難となっている状況がある。神役就任を拒否する候補者たちからは、現在は食すことさえなく、栽培もされていない農作物の祈願をなぜ日常生活を犠牲にしてまで行わなければならないのか、といった疑問の声が上がっている。そのため数年前には池間、佐良浜、西原の区長が集まり、村落祭祀の回数を減らす議論を交わしたこともある。当時の池間区長は「粟、麦、ひえなど、種類、項目別にやっていると息が詰まるし、今は作ってもいない。作らないものに豊作を願うのはおかしいから辞めよう」、「キビのニガイこそやるべきだ」と両地域の区長を説得した。しかし、地元の人や年配者の「昔からやっていることだから、きちんとやれ」という声に結果として回数を変更することができず、池間では村落祭祀の中断を招いたという現状がある〔平井2007a:371〕。

一方で、村落祭祀の内容を個別に見てみると、現代の日常生活と密接に関わるものもあり、その一つが今回事例として取り上げた生徒願いである。生徒願いを村落祭祀全体の中で位置づけてみると、農耕儀礼を中心とする他の村落祭祀とは性質が異なり、先行研究で確認できただけでも宮古諸島の各地で行われていることがわかった。さらに西原の場合には、元ナナムイヌンマが担い手として参加するだけでなく、ナナムイに加入していない女性たちが子供の代理願いを積極的に依頼するといった他の村落祭祀とは異なる側面もある。

ここで生徒願いが行われるようになった歴史的背景を西原を事例に考えてみたい。西原は1874（明治7）年に池間島と伊良部島佐良浜から分村し、池間のウバルズ御嶽の祭神であるウラセリクタメナウノマヌスの分身を祀っただけでなく〔仲間1980:21-22〕、多くの村落祭祀をも引き継いだ。1879（明治12）年に琉球処分によって沖縄県を設置した明治政府は、翌年の1880年に小学校、旧制中学校、師範学校を設置し、本土と同じ学校教育制度を沖縄に布いた〔小国2008:133-134〕。仲宗根が指摘するように、生徒願いは一般子弟が教育を受けられるようになった1882（明治15）年以後始まった比較的新しい村落祭祀であるといえる〔仲宗根1992:529〕。実際西辺小学校の沿革を見ても、開校は1887（明治20）年となっており、また西辺中学校においては1949（昭和24）年となっている〔仲間1974:135、141〕。つまり、分村当時はまだ生徒願いは存在していなかったのである。そして、現在小中学校に設置されているイビも、校舎が西原に建設される時に併設されたといえる。

以上は西原の事例であるが、生徒願いを行う宮古諸島の各地の事例も当てはまる点が多いといえてよい。その上で、ここで注目すべきは小中学校にイビが併設されているという点ではないだろうか。イビとは、通常御嶽の中でも「最も神聖な場所」を意味し、場所によっては男子

禁制でさえある〔稲福2008:35〕。言い換えると、宮古諸島の小中学校では、学校という敷地内に神々が祀られるだけでなく、職員や生徒の安全や学業成就祈願が行われるという特徴があるといえる。

最後に、西原では通常の村落祭祀では使用することのない卵をシートウニガイに供えている。本稿で示したブンビシの凡例は、西原の神役間で代々「昔から」継承されてきた神道具と供物の一覧である。供物として卵を供えるのは普通教育が普及した後の「新しい」ことなので、凡例の中には記載していない。しかしながら、「卵には生徒の魂が込められている」といった新たな意味が付加されているだけでなく、教員にはそれを大切に食べるという義務、言わば神前における禁忌すらある。粟や麦の豊作祈願は現代の生活には必要がないため行わないといった考え方があったとしても、子供の健康や幸せを願わない親はなく、その拠点が学校であり、ナナムイとなっている。その意味で、生徒願いは特別な祈願であるといえる。

本稿では村落祭祀全体における生徒願いの位置づけと特徴についてのみ報告したが、宮古諸島の別の地域も含め、今後もさらなる考察を深めたい。

註

- ¹ 神行事、神願い（カンニガイ）という言い方もあるが、本稿では村落単位で行う儀礼として村落祭祀という用語を使用する。
- ² 上原孝三は西原の年中行事は大きく2つに分けて考えることができるとし、基準をヒューイトリヤによって決定されたか否かにおいている〔上原1989:183〕。本稿は上原の指摘に従っている。
- ³ ナナムイでは神役が代々継承するカミガマという神壺がある。ここで述べるカミガマはそれとは異なる。
- ⁴ 線香は火を付けて供えるものと火を付けないで供えるものとに分かれており、ハナ、酒、塩の供え方や供える向きにも一定の法則がある。
- ⁵ クイチャーには「声を合わせる」という意味があり、声をかけあいながら踊る宮古諸島の伝統芸能の1つである〔与那覇2003:153〕。

参考文献

- 赤嶺和子 2001 「ナナムイ賛歌－ナナムイヌンマ10年の記憶」 比嘉豊光 『光るナナムイの神々 沖縄～宮古島～西原 1997～2001』 風土社
- 稲福みき子 2008 「イビ」 渡邊欣雄他編 『沖縄民俗辞典』 吉川弘文堂
- 伊良部村史編纂委員会 1978 『伊良部村史』 伊良部村役場
- 上原孝三 1983 「西原のユークイ粗描」 『沖縄文化』 19-2-60 沖縄文化協会
- 上原孝三 1989 「宮古島西原の年中行事概略－歌謡との関連をめぐって－」 外間守善 『沖縄文化－沖縄文化協会創設40周年記念誌－』 ロマン書房
- 上原孝三 1996 「西原の年中行事」 『在沖西辺郷友会結成30周年記念誌 躍進・西辺』 在沖西辺

郷友会

- 大川恵良 1974 『伊良部郷土誌』 大川恵良
- 大本憲夫 1993 「伊良部の祭祀世界(1)」 『山村女子短期大学紀要』 5 山村学園短期大学教務委員会
- 大本憲夫 1998 「伊良部の祭祀世界 (2)」 『山村女子短期大学紀要』 10 山村学園短期大学教務委員会
- 『沖縄タイムス』 2004年4月25日朝刊19面市町村
- 小国喜弘 2008 「学校」 渡邊欣雄他編 『沖縄民俗辞典』 吉川弘文堂
- 川上哲也 2003 『たまうつ先生－「楽校」づくりへの道』 文芸社
- 島村恭則 1993 「民間巫者の神話的世界と村落祭祀体系の改変－宮古島狩俣の事例－」 『日本民俗学』 194 日本民俗学会
- 仲宗根将二 1992 「宮古の歴史と信仰」 谷川健一 『海と列島文化 第6巻 琉球弧の世界』 小学館
- 仲間井佐六 1980 『宮古お嶽集』 近代情報
- 仲間弘雅 1974 『西原創立百周年記念誌』 西原創立百周年記念事業期成会
- 野口武徳 1972 『沖縄池間島民俗誌』 未来社
- 比嘉豊光 2001 『光るナナムイの神々 沖縄・宮古島～西原～ 1997～2001』 風土社
- 平井芽阿里 2006 「村落祭祀の変容と伝承－沖縄県宮古諸島西原を事例として－」 『地域文化論叢』 8 沖縄国際大学大学院
- 平井芽阿里 2007 a 「消えゆく村落祭祀－改変と保守という選択にみる継続の要因－」 『次世代人文社会研究』 3 韓日次世代学術FORUM
- 平井芽阿里 2007 b 「村落祭祀継続の要因に関する一考察－なぜ神役であり続けるのか：宮古諸島西原の事例」 『比較民俗研究』 21 比較民俗研究会
- 平良市史編さん委員会編 1989 『平良市史第七巻資料編5民俗・歌謡』 平良市教育委員会
- 琉球大学民俗研究クラブ編 1972 『沖縄民俗』 19 琉球大学民俗研究クラブ
- 与那覇ユヌス編 2003 『宮古スマフツ辞典』

謝辞

本稿は2009年3月31日に立命館大学大学院文学研究科に提出した博士論文「南西諸島の村落祭祀の現状と民間信仰に関する考察－宮古諸島西原のナナムイを事例として－」の一部を加筆、修正したものである。執筆に当たり、長年ご指導いただいた多くの先生方、西原の神々、西原のアパラギオバーターとオジター、寄川家の皆様にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。